『比較論理学研究』第 8 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2010)

トマス・アクィナスにおける Plotinus 像
――「魂の乗りもの」理論との関連において――

高 橋 淳 友

1．はじめに

今回の拙論の主題であるトマス・アクィナスにおける Plotinus（プロティノス）像[1]を考える場合留意すべき点は，トマスの生きた時代には，プロティノスの著作は，それ自体としては知られていなかったという点であろう。アウグスティヌスは，ラテン語訳でプロティノスの著作に接していたとされるが，プロティノスの著作がそれとして読まれるようになるには，マルシリオ・フィチィーノによるギリシャ語からラテン語への翻訳をまたなければならなかったのである。ラテン語訳の存在が重要なのは，西洋中世のラテン語圏においては，ギリシャ語やアラビア語を読むことができるということが，学者の間でも必ずしも一般的なことではなく，いわば特殊技能の範疇に入るといってよいことだったからである。

だが，上記のような事情は，トマスの時代，プロティノスの思想が全く知られていなかったことを意味するものではない。トマスの時代，プロティノスの著作は直接目にされていたわけではないにしても，先に言及したアウグスティヌスの『神の国』において，プラトン派の人々，つまりギリシャ人のポルフィリオス，イアンブリコス，そしてギリシャ語とラテン語に通じたアプレイウス[2]といった人々とともに Plotinus の名前が挙げられているように，間接的に，彼が哲学史上重要な人物であることは知られていたし，またその思想も『神の国』のなかで触れられることで知られていたのである。

ギリシャ語で書かれたものにしろ，あるいはアラビア語でのものにしろ，ラテン語に翻訳されていない著作の内容が，西洋中世の思想界に知られる場合，プロティノスがそうであるように，それは，いわば〈伝言ゲーム〉的に間接的に知られる，ということになるわけである。たとえば，当該のテキストの内容に言及したラテン語の著作が知られる，あるいは言及した著作がラテン語に翻訳される，または，その当該の言語に通じた人から知らされる等々によって。だが，このように間接的に知られるという場合，やはり〈伝言ゲーム〉がそうであるように，情報の伝わり方，受け取り方という点で，伝わったものと，もとのテキストの内容との間にずれが生じ，それに伴って，受け手のなかで形成される，思想的な意味での原著者の像に〈ずれ〉が生じてくるのは当然である。

今回の拙論では，上記のような，いわば〈伝言ゲーム〉により，トマスのうちに形成されていた Plotinus 像の在り方を，魂の有するある種のコルプス（物体，身体）―拙論の著者が関心を抱いている，「魂の乗りもの（オケーマ）」と

[1]なお，Plotinus，プロティヌスに関してであるが，これは，ラテン世界で理解された形でのプロティノスを示すために表記として用いた。

[2]Saint Augustine, *The City of God Against the Pagans*, VIII, 12 "Ex quibus sunt valde nobilitati Graeci Plotinus, Iamblichus, Porphyrius; in utraque autem limgua, id est Graeca et Latina, Apuleius Afer extitit Platonicus nobilis. Sed hi omnes et ceteri eius modi et ipse Plato diis plurimis esse sacra facienda putaverunt."

いってよい—の点から吟味することを意図している。吟味の対象とするトマスのテキストとしては,『分離実体論』—トマス晩年の著作で未完—と,それに加えて『知性の単一性について』を取り上げる。両著作におけるプロティノスについてのトマスの言は,前者にあっては,先に触れたアウグスティヌス『神の国』を踏まえたものであり,後者にあっては,マクロビウス『スキピオの夢註解』に基づいてなされものであるが,これらで認められる言及から浮き彫りになるPlotinus像は,以下で示してゆくように,いわば,アプレイウスやマクロビウス,そしてプロクロスといった人々の思想的影響下において形成されたPlotinus像なのである。

2. アプレイウス的Plotinus像

『分離実体論』(Klünkerによる独語訳付き羅独対訳版を使用[3])でトマスがプロティノスに触れているのは,以下のような,「プラトン主義者たち」の「ダイモーン(羅:daemon,複数はdaemones)」についての見解を述べるなかにおいてである。「ダイモーン」は,しばしば中世キリスト教圏で議論の俎上に載せられているものであるが,トマスは,「ダイモーン」たちが,すべからくそして常に悪しきものたちであったわけではなく,かれらのうちのあるものどもが自己の選択により悪しくありはじめた点に関連し,ディオニシウスやオリゲネス,アウグスティヌスを援用した後,「プラトン主義者たち」の言うこともそれに合致していると述べるのだが,プロティノスは,そうした「プラトン主義者たち」の一人として言及されている。

> 彼ら(qui=プラトン主義者たち)は,ダイモーンたちのあるものたちを善いものたち,あるものどもを悪いものどもだと言う。[このプラトン主義者たちは,]彼ら[ダイモーンたち]が自己の選択でもって善くなったりあるいは悪くなったりしたのだ,として[そう言うのである]。ここからまた,さらに進んでプロティヌスはこう言ったのである(Unde et Plotinus ulterius procedens dixit)。[曰く,]「人間達の魂からダイモーンたちが生じる(animas hominum daemones fieri),すなわち,[その人間達が]善い報いのあったものたちならばラーレス(ラールたち)が生じるが,悪い[報いのあった]ものたちならレムレース(複数形)が,あるいはラルヴァエ(ラルヴァたち)が生じる(ex hominibus fieri Lares, si meriti boni sunt, Lemures autem mali, seu Larvas)」,「しかし,彼らが属するのが善い報いのあったものたちであるかあるいは悪い報いのあったものたちであるか不確かなら,彼らはマネスと言われる(Manes autem eos dici, si incertun est eos bonorum seu malorum esse meritorum)」と。アウグスティヌスが『神の国』9巻で提示しているように。(Klünker前掲書,S. 143-144)

上記引用によるならば,このような「プラトン主義者たち」のなかにあって,プロティヌスはさらに踏みこんだ立場,つまり,ダイモーンと人間の魂は,別のものではないとする論者で,単に「ダイモーン」に善いものと悪いものがいるというだけではなく,それらが,人間の魂に由来すると述べている論者として言及されている。そして,これが『分離実体論』におけるプロティノス像だといってよい。

ここで留意するべきであることは,上記引用からすると,トマスのこのようなプロティヌス理解の源泉が,プロティヌス自身の著作ではなく,アウグスティヌスの『神の国』であるということ,つまり,彼がここで開陳しているプロティヌス観は,アウグスティヌスの理解に依拠したものである,ということである。しかしながら,これもまた議論の余地がある問題である。というのも,『分離実体論』からの上記引用文に見られる内容に相当する部分が,アウグスティヌスの『神の国』でどのように言われているかを,例えばLoeb版(the Loeb Classical Library)の同書[4]で見てみると,以下のようになっているからである。

> Dicit quidem et animas hominum daemones esse et ex hominibus fieri lares, si boni meriti sunt; lemres, si mali, seu larvas; manes autem deos dici, si incertum est bonorum eos seu malorum esse meritorum.
>
> 実際,[彼は]こう言う,人間たちの魂はダイモーンである,と。そして,人間たちからは,彼らがよい報いのあったものたちならラーレスが生じるが,悪い[報いのあったものたち]ならばレムレース,あるいはラルヴァエが[生じ

[3]Thomas von Aquin, *Von Wesen der Engel. De Substantiis Separatis. überset.*, von W.-U. Klünker (1989 Stuttgart).

[4]Saint Augustine, *The City of God Against the Pagans.* III, Books VIII-XI, trans., by D.S.Wiesen(1968).

る，］と。だが，かれらがよい報いのあったものたちに属するのか悪い報いのあったものたちに属するのか不確かであるなら，マネス神といわれる，と。(Loeb 版前掲書，p. 188-190)

この引用で分かるように，アウグスティヌスの文章では dicit(三人称単数のなにかが言う) とあるだけであり，トマスはこれを「プロティヌス」が「dixit（言った)」ものと捉えているということになる。だが，それに対して，対応すると思われる箇所を，『神の国』の近代語訳で見てみると，発言の主はプロティノスとされていない。例えば，上記で引用した Loeb 版にみられる英語訳 (対訳，前掲書 p.189-191) では[5]，人間の魂はダイモーンであるということ，そして善行が報いるに値するなら彼らはラーレスとなり，悪かったならレムレースあるいはラルヴァエとなるということ，そして，彼らがよくふるまったのかあるいは悪くふるまったのかが不確かならば，マネス神と呼ばれるということが述べられているが，その発言の主はアプレイウスとなっている。また，『神の国』の日本語訳で当該箇所を参照してみると，服部英次郎氏による訳文[6]でも，茂野昭男氏，野町啓氏[7]による訳文でも，アプレイウスが〈人間の魂がダイモーンである〉云々と述べたのだとなっている。

このように，近代語訳では，トマスが「プロティヌス」の見解として語っているものは，アプレイウス，アウグスティヌスがラテン語圏を代表するプラトン派の哲学者として『神の国』で言及していた彼の見解ということになっている。実際，『神の国』でもしばしば言及されているアプレイウスの著作の一つ，『ソクラテスの神について』を参照するならば，トマスがプロティヌスの見解として述べていた上記のごときことも，『神の国』の諸近代語訳と同様に，アプレイウスに記するのが妥当なようにも思われる。アプレイウスは『ソクラテスの神について (*De deo Socratis*)』(M.Baltes 等による羅独対訳版[8]) のなかで，「生の労役が満期になって，辞することを自己の身体に対して誓う人間の魂（animus humanus emeritis stipendiis vitae corpori suo abiurans）はダイモーンたちの一種である」という文に続けて次のように述べているのである。

このような魂を私は，古いラテン語でレムルと言われてきたものとして見出す。これらレムレース (レムルたち) のうち，自分の子孫たちへの配慮を割り当てられて，宥められ鎮められた守護神として住居を有するものが，家族のラールと言われる。対して，生に敵対した報いのため，いかなる［良き］住居にも定まらない遍歴，ある巡礼のごときそれによって懲らしめられるもの―良い人間たちにとっては無益に怖がらせるもの，悪い［人間］たちにとっては確実に有害なもの―，そうした類を大半の人々はラルヴァたちと言う。が，ラールであるのかラルヴァであるのか，どの割り当てがかれら［レムレース］の各々に生じるかが不確かであるとき，［その人々は］マネス神を名前として付ける。すなわち顕彰のためもあって神という名称が加えられてある訳である。(M.Baltes 等前掲書，S.72) [9]

トマスがこのような見解をアプレイウスに帰しているのに対し，例えば，セビリヤのイシドールスは，「マネス」についてのアプレイウスの言及に触れているので[10]，アプレイウスの見解

[5]Apuleius indeed also say that the souls of men are demons and that, on ceasing to be the men, they become lares, if they have deserved this reward for their good conduct, and lemures or larvae if they have been bad, while they are called di manes if it is uncertain whether they have behaved well or ill.

[6]岩波文庫版アウグスティヌス『神の国（二)』(岩波書店，1982 年)，257 頁。

[7]アウグスティヌス著作集 12『神の国（二)』(教文館，1982 年)，259 頁。

[8]Apuleius, *Über den Gott des Sokrates*, überset. von M.Baltes, M.-L. Lakmann, J.M. Dilon, P. Donini, R. Hafner(Darmstadt, 2004).

[9]Hunc vetere Latina lingua reperio Lemurem dictitatum. Ex hisce ergo Lemuribus qui posterorum suorum curam sortitus placto et quieto numine domum possidet, Lar dicitur familiaris; qui vero ob adversa vitae merita nullis [bonis] sedibus incerta vagatione ceu quodam exilio punitur - inane terriculamentum bonis hominibus, ceterum malis noxium - id genus plerique Larvas perhibent. cum vero incertum est, quae cuique eorum sortitio evenerit, utrum Lar sit an Larva, nomine Manem deum nuncupant: scilicet et honoris gratia dei vocabulum additum est; なお，霊魂の死後におけるこれらの在り方は，先に引用した Loeb 版『神の国』の注でも（Loeb 版前掲書 p. 190-191)，「ローマ人により恐れられたり称えられたりした」霊の様々なカテゴリーと指摘されるように，ラテン語圏での霊魂観に結びついたものである。

[10]*Isidori Hispalensis Episcopi Etymologiarvm sive Originvm* Libri XX, 1911, Oxford. Lib. VIII, xi, 100, "Apuleius autem ait eos κατ' ἀντίφασιν dici manes, hoc est mites ac modestos, cum sint terribiles et inmanes, ut Parcas, ut Eumenides."

が必ずしも知られていなかったわけではない。そして，このように，アプレイウスの見解をプロティノスの見解とするその一方でトマスは，『分離実体論』では，アプレイウスの見解として『ソクラテスの神について』にある言として，ダイモーンが，類と言う点では神と人との中間にあり，精神的には理性的，魂は受動的，身体は空気で出来ていて時という点では永遠のもの，という在り方について触れている[11]。したがって，トマスがアプレイウスの見解を「プロティヌス」の見解だとしているのは，彼が『神の国』を参照することで，『ソクラテスの神について』という著作の名前を知っており，しかもその内容についてもある程度の知識を有してはいたが，アプレイウスの原典にはあたっていなかったことが原因であると予想できる。

トマスが利用した『神の国』が，やはり現行のそれと同じように，dicitの主語が明示されていないものであった場合，トマスがその主語をプロティノスと解釈した理由になる章句があったということになる。可能性としては，彼が用いていた『神の国』では，実際先のdicitの主語がプロティノスとなっていたということも否定できないが，この場合も，写本作成においてdicitの主語がなぜそう読まれたのかを考えることになるので，結局『神の国』にプロティノスと解釈した理由になる章句があったということになる。

それは，現在見られる『神の国』に鑑みると，「プロティヌス」の名前が挙げられて，

> プロティヌスは(Plotinus)確かに，我々の記憶にあるあたりの時代では，余人に比べより優れた仕方でプラトンを理解したと賞賛される。その彼が(is)人間の魂について論じた際，[彼は]「父は」と，こう言うのである，「同情して，彼らのために死すべき紐帯を創ったのだ」と。そうして，身体によって人間は死すべきものということ自体，父なる神の同情へと属することと[彼は]信じたのである，この生の惨めさが常に保持されるということが決してないように。

と語られた後，それに続く形で上記の引用箇所も含めて，特に名前が挙げられず，三人称単数の何者かが「言う」，「信じた」というかたちで，ある見解が参照されて議論が進められている点にあるものと推測される（Loeb版前掲書，p. 186-188）。

> こうした同情に相応しくないと判定されたのが，ダイモーンたちが持つ邪悪さで，それは，人間のごとき死すべき［身体］でなく永遠である身体を，情動を被る魂の惨めさにおいて受け取るものなのである。実際，もし［ダイモーンたちが］彼ら［人間たち］とともに，死すべき身体を持ち，神々とともに，至福な魂を有したのだとすると，彼らは人間たちより幸せということになっていたろう。だが，次のようであるならば，［今度は］彼らは人間と等しいものということになっていただろう，つまり，もし［ダイモーンたちが］，彼ら［人間たち］とともに，惨めな魂をそなえ，少なくとも死すべきものである身体を有することを得ていて，もし辛苦からはなれてあるいは死において安らぐよう，信仰心のいくばくかを獲得していたとするなら，［彼らは人間と等しいものということになっていただろう］。しかしいまや彼らは，惨めな魂により，人間よりもより幸福というわけではない，それのみならず，身体という永遠の紐帯により，［人間よりも］より惨めなものなのである。というのも，ダイモーンたちは永遠のものたちだと極めてはっきりと［彼は］言ったので，敬虔さと智恵に関わる修練を積んでダイモーンから神々が生じると理解されることを［彼は］欲しなかったからである。

以上の文に，先に挙げた「実際，［彼は］こう言う，人間たちの魂はダイモーンである」云々が続くのである。トマスの『分離実体論』の邦語訳（八木雄二，矢玉俊彦訳）を参照すると，先のトマスの発言について，注で，トマスが依拠しているのはアプレイウスの原典ではなく「アウグスティヌスの『神の国』における引用と記述に依拠している」[12]と指摘されているが，トマスは，『神の国』のこの箇所で「彼はこう言う」という形で言及されている見解の持ち主「彼」を，前からの続きで「プロティヌス」と考えた訳である。

[11] このような発言自体は『神の国』8巻16章，9巻8章でアプレイウスの言葉として引用されているので，『神の国』を読んでいるトマスは当然心得ているはずである。12章冒頭でもこう言われている。Sed nunc de his agimus quos in natura propria descripsit inter deos et homines genere animalia, mente rationalia, animo passiva, corpore aeria, tempore aeterna. アプレイウスについてはKlünker前掲書，S. 164を参照されたい。

[12] 中世思想原典集成14『トマス・アクィナス』（平凡社，1993年，1996年），716頁。

そして，人間が死後ダイモンになるということをプロティノスの考えとしているという点から，『神の国』9巻11章でアウグスティヌスが続けて述べるマネス等に関わる言説も，トマスは「プロティヌス」や彼に従うものたちに帰したのではと考えられる。また，そこの文章でも，彼は何々した，という具合に名前が明示されずに説明が以下のように続いて行く。

> In qua opinione quantam voraginem aperiant sectandis perditis moribus quis non videat, si vel paululum adtendat? Quando quidem quamlibet nequam homines fuerint, vel larvas se fieri dum opinantur, vel dum manes deos, tanto peiores fiunt quanto sunt nocendi cupidiore, ut etiam quibusdam sacrificiis tamquam divinis honoribus post mortem se invitari opinentur ut noceant. Larvas quippe dicit esse noxios daemones ex hominibus factos. Sed hinc alia quaestio est. Inde autem perhibet appellari Graeco beatos εὐδαίμονας quod boni sint animai, hoc est boni daemones, animos quoque hominum daemones esse confirmans.
>
> この見解で，堕落した習俗に追従するものたちに，どれほどの深淵が口を開くかを，ほんの一寸でも注意するなら誰が理解しないだろうか。実際，彼らがたとえどんな不身持な人間であっても，自分はラルヴァエになるのだとか，マネス神に［なるのだとか］彼らは考える以上，［次のような具合に］彼らが加害の欲望を募らせれば募らせるほど，彼らはより一層悪くなってゆくのである。［すなわち］いわば神への褒賞のごときなんらかの犠牲でもってさらに，死後，自分は，害をなすよう誘われるのだと彼らは考えるという具合に。確かに，ラルヴァエは人間から生じた有害なダイモーンだと［彼は］言う（dicit）。だがここから別の問題が生じる。そこで，至福なものたちがギリシャ語でエウダイモネスと称される―［彼ら至福なものたちは］善き魂，つまり善きダイモーンだから―ことを［彼は］提示し（perhibet），人間達の魂がまたダイモーンであることを確固たるものとしている（confirmans）のである。

3. プロクロス的・マクロビウス的「プロティヌス」像

以上見てきたようなアプレイウス的な「プロティヌス」像は，それが依拠している，先に引用した『神の国』の記述に照らしてみるなら，次のような問題が生じるはずである。つまり，ダイモーンの身体の問題である。アウグスティヌスは，ダイモーンを永遠である身体を有するものとして，可死的身体を有する人間と対比して語っていなかっただろうか。トマスがアウグスティヌスの記述に依拠した上で「プロティヌス」を捉えていたとすると，この対比についてはどのように考えるのだろうか。死によって身体の頚木を逃れた人間の魂がダイモーンだとするなら，この場合のダイモーンは，身体をそもそも持たない存在ということにはならないだろうか。

『分離実体論』を見るなら，トマスもこのような問題が生じることを承知しており，同書においてこう述べているのである。

> ところで，プロティヌスが，彼が人間の魂は死後ダイモーンとなると考えたという点で，ダイモーンたちは空気の身体であると主張するプラトン主義者たちの見解から逸れたと考えてはならない。というのも，プラトン主義者たちの見解によると，人間の魂はまた，そうした滅んでしまいうる身体のほかに，エーテルで出来たある身体を有していて，知覚されうる身体の消失後も，滅んだりしえない身体としてのそれら［エーテルで出来た身体］に常に結びついているからである。かくしてプロクルスは『神学綱要』という書においてこう言ったのである。「分有されうるすべての魂は，次のような身体，つまり，第一のものにして永遠的，そして生成もしえないし滅んだりしえない「ヒュポスタシス（実質）」を有する身体に結びついている」，と。そしてかくして，彼らによれば，身体から分離した魂は，空気の動物であることを辞めない。（Klünker 前掲書，S. 145）

このような説明からは，「プロティヌス」の考えに即して，死後，人間の魂が身体をなくしてダイモーンとなると考えたとしても，それはダイモーンが身体を持たない魂だけのものとして構想されているわけではないことをトマスが示そうとしていることがわかる。つまり，「プロティヌス」―アプレイウス的「プロティヌス」―の考えでも，やはり，他のプラトン主義者同様，ダイモーンは「空気の身体」を持っているということになり，「プロティヌス」は他のプラトン主義者の考えからずれているわけではない，といっているわけである。この理由として，そもそも人間の身体は永遠の身体を持っていると「プラトン主義者」たちにより考えられていると言う点が挙げられているが，当然このなかには「プロティヌス」も含まれることになるだろう。

『分離実体論』の記述するところによれば(Klünker 前掲書, S. 27-28), プラトン主義者たちは, コルプスの序列・位階として, 天体—魂を有する生きものとしてのそれ—の下に, 永遠に魂を分有する, 不死のコルプス, すなわち空気やアイテールのコルプスを措定し, それのうちあるものを, 地上のコルプスから完全に解き放たれたものと主張し, ダイモーンの身体であると述べたというのである。そして, 他方, 地上のコルプスに内在する永遠に魂を分有するコルプスなるものがあって, これは人間の魂に関わるものであるとされるもので, プラトン主義者たちの主張によれば, この内在するコルプスが魂を分有するとされるのである。ただし, 上記引用中でのトマスの言に基づくなら, 「プロティヌス」を含めたこれら「プラトン主義者」の考えでは, ダイモーンの身体とは, いわば, この現世の身体が滅ぶことで, もともと持っていた永遠の身体が剥き出しになったものという位置付けになるといえるだろう。

以上が『分離実体論』に見られるプロティノスについてのトマスの言である。『分離実体論』は, トマスの晩年に近い頃の著作であるため, トマスが辿りついた最終的なプロティノス理解の一面であるといってよいだろう。しかし上記のような特徴は, 果たしてトマス晩年におけるものといってよいのだろうか。ひとつには, 先に挙げたアウグスティヌス『神の国』の箇所の読み方であるが, あのような読み方は,『分離実体論』執筆時, つまりトマスの晩年近くになって始めて生じたのであろうか。『神の国』という, トマスが引用するところが多い書という点から推測するに, トマスは恐らく前々からあの箇所をアプレイウスの見解として読むのではなく, プロティノスの見解として解釈していた, と推測するほうが自然であるように思われる。しかもそれを支えているのが, トマスが述べる, 「プラトン主義者」たちの見解, 魂が非可滅的な身体を有しているというそれということになるだろう。

以上のように考えてみるならば,『分離実体論』に先立つと推測される著作『知性の単一性について』(マリエッチ版[13]を使用) において見られる, 次のようなプロティノスに関するトマスの発言に留意し吟味する必要があるだろう。

> Sed et Plotinus, ut Macrobius refert, ipsam animam hominem esse testatur, sic dicens: 《Ergo qui videtur, non ipse verus homo est, sed ille a quo regitur quod videtur. Sic, cum morte animalis discedit animatio, cadit corpus a regente viduatum; et hoc est quod videtur in homine mortale. Anima vero, quae verus homo est, ab omni mortalitatis conditione aliena est》. Qui quidem Plotinus, unus de magnis [commentatoribus], ponitur inter commentators Aristotelis, ut Simplicius refert in *Commento Praedicamentorum*. (Marietti 版 229 節)
>
> だがプロティヌスも, マクロビウスが言及しているように, 魂そのものが人間であること (ipsam animam hominem esse) を証言している (testatur), かく語って (sic dicens)。「それゆえ見られるものは真の人間ではない。そうではなく, 見られるものがそれにより支配されるところのもの [つまり, 見られるものを支配するもの] が [真の人間なのである]。かくて, 生命力 (animatio) が生きものの死でもって消失するとき, 支配するものを欠いた身体は死ぬ。これが死すべき人間において見られることなのである。対して, 真の人間である魂は, 死すべきものであることのすべての条件から無縁のものなのである」。実際, 彼プロティヌスは, シンプリキウスが『カテゴリー論註解』で言及しているように, アリストテレス注釈者のうちでは有力者の一人とされる。

この引用では,「プロティヌス」の人間の魂と身体の関係についての見解をマクロビウス『スキピオの夢註解 (*Commentarii in Somnivm Scipionis*)』から引用して述べ, その引用[14]に加え

[13] *S.Thomae Aquinatis Opuscula Philosophica*, cura et studio R.M. Spiazzi, 1953.

[14] *Ambrosii Theodosii Macrobii Commentarii in Somnivm Scipionis*, ed. J. Willis, Bibliotheca Scriptorvm Graecorvm et Romanorvm Tevbneriana, Stuttgart und Leipzig, 1970, 1994. を使用した。なお, 同書において, 上記『知性の単一性について』でトマスが引用している箇所に対応するのは, 以下の下線を引いた部分である。

In hoc ergo libro Plotinus quaerit cuius sint in nobis voluptates, maerores, metusque ac desideria et animositas vel dolores, postremo cogitations et intellectus, utrum merae animae an vero animae an vero animae utentis corpore; et post multa quae sub copiosa rerum densitate disseruit, quae nunc nobis ob hoc solum praetereunde sunt, ne usque ad fastidii necessitatem volumen extendant, hoc postremo pronuntiat, animal esse corpus animatum. Sed nec neglectum vel non quaesitum relinquit,

てシンプリキオスからの引用[15]によりプロティノスの評価が言及されている。さらには，この「それゆえ見られるものは真の人間ではない」云々は，『スキピオの夢註解』を参照するなら，プロティヌスの言葉ではなくマクロビウスの言—プロティヌスの見解を踏まえているものであるとしても—であるように思われる。

上記，『知性の単一性について』でマクロビウスを典拠として述べられていた「真の人間」としての魂も，後の『分離実体論』の時点でのトマスの立場から再見すると，身体が滅した後にも永遠のコルプスを有する魂のこととして捉え直すことも可能，ということになるはずであるが，『知性の単一性について』の時点でも，コルプスに関するそういう思考自体については，トマスは知っていたのである。彼は，『知性の単一性について』で，「『魂はある非可滅的な身体を有していて，その身体からは決して分離されない』という（quod anima haberet corpus quoddam incorrutibile, a quo numquam separetur）」主張をしたものたちがいたことについて触れているからである。

このように主張したものたちがいたことをトマスは示すのみで，特に名前を挙げて言及しているわけではないので，彼の念頭にあったのが，具体的にはどういった人々であるのかという点に関しては，断定することはできない。だが，諸書の註を見てみると，「プラトン主義者たち」であることが示唆されている[16]ので，可滅的な身体とは別の身体を魂が持つという点に関して，プロティヌスにしろ，プロクロスにしろ，名前が触れられてはいないが，トマスの念頭にあったのが，彼らであると推定することは可能であろう。

4. 結語

さて，以上のような形でのプロティヌス理解は，トマスがプロクロスの『神学綱要』で語られている永遠のコルプスと結び付けているという点に鑑みるなら，そして，プロクロス『神学綱要』に対する先行研究を踏まえるなら，次のような問題がある。すなわち，プロクロス『神学綱要』に対する先行研究によると，先のトマスの引用にあったコルプスとは，『神学綱要』で語られている魂の「乗りもの」—oxema すなわち receptacla, sedilis（命題 205）[17]—であるとされる[18]のだが，プロティヌスの場合，プロクロスが述べるような，「永遠のコルプス」としての「乗りもの」については述べていないとされる[19]からである。

『神学綱要』で見られる魂の「乗りもの」とは，魂により生を与えられていて，例えば魂が降下，上昇を行う時でも，魂の動きにより「どこにでも動く」もの，しかもこの動きに際して質料的なものが付加されたり除去されたりするもの（命題 209）[20]として語られているものではあるが，そもそも新プラトン主義者における「乗りもの」の概念は，プラトンの対話篇で示唆される，上昇し下降する「魂」の在り方，と，アリストテレスなどの「気息」説とが結びついて次第に形成されてきたものとされ，その捉え方は論者によって一様ではないとされている[21]。

---

quo animae beneficio, quave viae societatis animetur. Has ergo omnes quas praediximus passions adsignat animali, verum autem hominem ipsam animam esse testatur. Ergo qui videtur, non ipse verus homo est; sed verus ille est a quo regitur quod videtur. Sic cum morte animalis discesserit animatio, cadit corpus regente viduatum, et hoc est quod videtur in homine mortale, anima autem, qui verus homo est, ab omni condicione mortalitatis aliena est, adeo ut in imitationem dei mundum regentis regat et ipsa corpus, dum a se animatur. (II, 12)

[15]Simplicius, *Commntaire sur les Catégories d'Aristote, traduction de Guillaume de Moerbeke*. tome I, ed. A. Patttin, Louvain, Paris, 1971. p.2 (prologus).

[16]たとえば，Keeler の校訂版（*Sancti Thomae Aquinatis Tractatus de Unitate Intellectus contra Averroistas*: Editio Critica, Rome, 1936, 1948, 1957）を底本として英訳をした B. H. Zedler の *On the Unity of the Intellect against the Averroists*, Milwaukee, 1968, p.36, n.88 には次のような脚注がある。Zedler によれば，Keeler はこのような主張をした人々に関して「古代の新プラトン主義者たち（特にプロクロス）」がこういうことを許容し，トマスは通常，著者の名前を挙げずに，この理論を Platonic として言及すると言っているという。

[17]Proclus, *Elementatio Theologica*, translata a Guillemo de Morbecca, herausg., von H. Boese, Leuven, 1987.

[18]例えば，E.R.Dodds, *Proclus The Elements of Theology*, Oxford, 1963, 1992, p.300, 304.

[19]例えば，ヨハン P. クリアーノ，桂芳樹（訳）『霊魂離脱とグノーシス』（岩波書店，2009 年，原著は 1984 年刊 *Expériences de l'extase*）180 - 181 頁を参照されたい。

[20]前掲，Proclus, *Elementatio Theologica*.

[21]Dodds 前掲書, p. 313-321. クリアーノ前掲書, 180-181 頁。

プロティノスにおいては，そもそもこのような魂の上昇下降に関わるかたちでの「乗りもの」という表現は見られないとされる。

プロティノスの『エネアデス』でも確かに魂の降下と上昇について触れられてはいる。しかしそれは例えば『エネアデス』の4の3—つまり，先の『神の国』[22]で触れられていたプロティヌスの典拠と目されていたもの—では，魂は「知性界」から出ると天界で物質を受け取り，降下に従いその粗雑性を増していくプロセスと，上昇に際してそれらを捨てていく過程が語られているだけで[23]「乗りもの」に関連付けられてはいない。トマス自身はプロティヌスの著作は目にしてはいないので，プロティノスのこのような立場は知り得ないとしても，先に見てきたようなトマスによるプロティヌスの取り扱いは，プロクロス的な「乗りもの」を知らないプロティヌスを，プロクロス的な永遠のコルプス（＝乗りもの）でもって説明しようとしていることになってしまうといえるだろう。

文献

Saint Augustine 1968, *The City of God Against the Pagans*, III, Books VIII-XI trans., by D.S.Wiesen, Loeb Classical Library, Cambridge (Mass.) and London.

アウグスティヌス 1982,『神の国（二)』, 服部英次郎訳, 岩波書店.

アウグスティヌス 1982,『神の国（二)』, 茂野昭男・野町啓訳,『アウグスティヌス著作集』12, 教文館.

Apuleius 2004, *Über den Gott des Sokrates*, überset. von M.Baltes, M.-L. Lakmann, J. M. Dilon, P. Donini, R. Hafner, Darmstadt.

ヨハン P. クリアーノ 2009,『霊魂離脱とグノーシス』, 桂芳樹訳, 岩波書店（原著は 1984 年刊 *Expériences de l'extase*).

Isidorus Hispalensis 1911, *Isidori Hispalensis Episcopi Etymologiarvm sive Originvm* Libri XX, ed. W.M. Lindsay, Oxford.

Ambrosius Theodosius Macrobius 1970 (repr. 1994), *Commentarii in Somnivm Scipionis*, ed. J. Willis, Bibliotheca Scriptorvm Graecorvm et Romanorvm Tevbneriana, Stuttgart und Leipzig.

Proclus 1987, *Elementatio Theologica*, translata a Guillemo de Morbecca, herausg., von H. Boese, Leuven.

Proclus 1963 (repr.1992), *The Elements of Theology*, A Revised Text with Translation, Introduction, and Commentary by E.R.Dodds, Oxford.

Simplicius 1971, *Commntaire sur les Catégories d'Aristote, traduction de Guillaume de Moerbeke*. tome I, ed. A. Patttin, Louvain, Paris.

Thomas von Aquin 1989, *Von Wesen der Engel. De Substantiis Separatis*, überset. von W.-U. Klünker, Stuttgart.

Thomas Aquinas 1968, *On the Unity of the Intellect against the Averroists*, trans. by B. H. Zedler, Milwaukee.

Thomas Aquinas 1936 (1948, 1957), *Sancti Thomae Aquinatis Tractatus de Unitate Intellectus contra Averroistas* ed. Leo W. Keeler, Rome.

Thomas Aquinas 1953, *S.Thomae Aquinatis Opuscula Philosophica*, cura et studio R.M. Spiazzi, Rome.

トマス・アクィナス 1993(1996),「知性の単一性について —— アヴェロエス主義者たちに対する論駁」, 水田英実訳, 中世思想原典集成 14『トマス・アクィナス』, 平凡社.

プロティノス, 1987,『プロティノス全集』第三巻, 田中美知太郎, 水地宗明, 田之頭安彦訳, 中央公論社.

（たかはし　じゅんすけ，　広島大学［哲学］）

付記

以上の拙論をまとめるにあたり，筆者（高橋淳友）の不手際および東北関東大震災に起因するよんどころない事情により，広島大学大学院准教授赤井清晃先生，同大学院生高橋祥吾氏，阿南貴之氏には，多大のご面倒をおかけする仕儀と相成った。この場をお借りして，上記お三方には，お詫びと御礼を申し上げさせていただきたい。なお，上記の拙論に問題があるとすれば，それはすべて筆者にその責はあるものではある。実際，拙稿に対し，かなり手を加える予定にしていたのだが，上記の事情により，それは断念せざるを得ず，筆者による検討が，未だ不十分なまま掲載していただく次第となったからである。『比較論理学研究』誌に掲載していただく拙論は，これが最後のものとなるかもしれないので，誠に慚愧に堪えない。

（震災の余震未だおさまらぬ青森県八戸市にて）

[22]前掲，服部訳『神の国』第二分冊，p.257, 訳注 (二)

[23]田中美知太郎, 水地宗明, 田之頭安彦訳『プロティノス全集　第三巻』(中央公論社，1987 年)，78 頁。